

# 和歌山県すさみ町の線香産業

—井澗家の線香水車を中心に—

はじめに

二〇一九年二月、熊野古道の整備やガイドをしている大辺路刈り開き隊と、和歌山大学の客員教授である湯崎真梨子氏（農村社会学）が、すさみ町入谷の水車小屋と線香水車の調査をさせていただきたいと筆者の父を訪ねてきた。以前から父・井澗和良（一九五四〜）に曾祖父・良太郎（一九〇〇〜一九九一）と高祖父・和三郎（一八五八〜一九二五）が線香工場を経営していたことは聞かされていたが、今もなおその遺構が残っているということを知り、筆者はこの時に初めて知ったのである<sup>1</sup>。

そこで筆者が改めて線香工場の跡地の視察を行ったところ、朽ちてはいるものの直径五メートル弱の大きな水車が現存することが確認された。杵や臼、篩などの製粉構造も良好な状態で残っており、水力のみですべての動力をまかなっていた時代の木製機械の遺構に大きく心を揺さぶられたのである。

このまま朽ちていくのを黙って見ているのは忍びなく、今の時代にこそ線香水車のようなサステイナブルな仕組みに価値が生まれるのではないかと考え、修復を試みることにした。それにともない、当時の線香水車の記録が残っていないか独自に調査を開始したが、町誌以外に具体的な記述は見当たらず、文献は皆無に近かった。当時の産業の実態を知るには、稼働当時の水車を知る人に聞き取り調査を行い、それらをもとに記録を残すことが最適と思われるので、近畿大学の藤井弘章氏（民俗学）の協力・ご指導のもと、記録をまとめること

にした。

本稿では、紀南地方の線香（杉線香）製造業について、すさみ町に所在する井澗家所有の線香水車を中心に紹介する。

なお、本稿においては、これを「すさみ線香水車」と呼ぶことにする。

## 第一章 江戸時代末期からの紀南地方の線香産業について

線香の製造の起源や歴史については諸説があり、分かっていない部分が多い。日本には室町末期から江戸初期の間に朝鮮または中国方面から技術が伝来したとされるが、海外から伝来したのを見本として堺の商人が製造したのが始まりとされている（社団法人鉄道貨物協会天王寺支部 一九五六）。江戸中期にかけて現在の大阪府堺市を中心に線香産業が発達し、江戸後期にかけて全国各地に線香製造が広まっていったと考えられる（栢 一九八〇）。



写真1 昭和31年頃の水車小屋（左端）（中央は水車小屋の右隣に建っていた住居。）（井澗家所蔵）

山下 桃子

戦後に国内最大の線香製造の町として栄えた淡路島の一宮町では、一九世紀半ばから線香づくりが始まったとされている〔浜岡 一九八五〕。当時、淡路島は堺や九州を結ぶ海上輸送網が発達しており、原料や製品の輸送の利便性が高かった。そのため、線香製造が軌道に乗ると、賃金もよくなったことから、堺から多くの技術者が淡路島に移住したという。

紀州における線香製造の歴史については不明な部分が多い。紀伊半島東部の尾鷲方面では、江戸末期に杉の葉を製粉した線香原料が盛んに製造されており、名古屋・大坂・江戸などに出荷されて、杉葉粉が地域の特産品となっていた〔尾鷲市 一九六九〕。尾鷲の線香原料製造は、享和年間（一八〇一～〇四）に、田辺（現在の和歌山県田辺市）近郷から学んだ技術をもとにして開始されたという〔土井 一八八五〕。したがって、田辺周辺での原料製粉は尾鷲方面よりも早くからおこなわれていたと推測され、少なくとも一八世紀後半には線香原料の製粉をおこなっていたと考えられる。ただし、線香原料の生産は統計などを見る限り、明治・大正に至るまで、和歌山県側よりも三重県側の方が盛んであった可能性がある。

『熊野市史』によると、明治二六年の三重県統計では、尾鷲市や熊野市を含む南牟婁郡で線香製造が一軒、線香の原料を作る製粉業が一四軒となっており、林業が栄えたことを背景に副産物を利用した線香原料の製粉が盛んだったことが分かる。ただし、主な原料は「杉葉粉」で、タブ粉の記述は見られない。三重県ではスギ粉を「杉葉粉」と呼び、主に大阪方面に出荷し、大阪で製品に加工されていた〔熊野市史編纂委員会 一九八三〕。

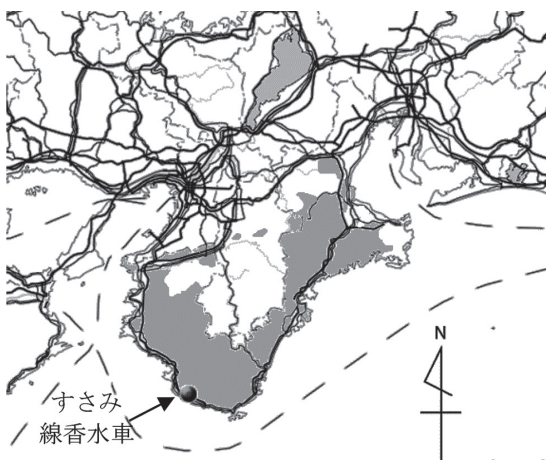
和歌山県の大正年間の統計書では、大正六年のみ「線香製造」の項目が見られ、東牟婁郡で一軒操業しているというデータが残っているが、井濶家やその他の工場については計上されていない。また、大正六年以降、昭和三〇年

代まで、「線香製造」の項目はなく、蚊取り線香の原料製粉についても計上されていなかった。このことから、大正年間だけを見ると、大正六年が和歌山県の線香製造量の最大値であった可能性が高い<sup>2)</sup>。

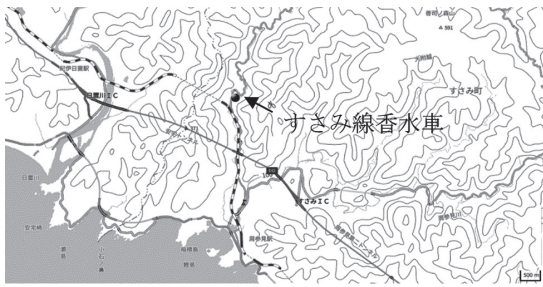
なお、線香製造の詳細については不明であるが、明治・大正期には、和歌山県南部の市ノ瀬（現在の上富田町）、鮎川（現在の田辺市、旧大塔村）、栗栖川（現在の田辺市中辺路町）、富里（現在の田辺市、旧大塔村）、市鹿野（現在の白浜町、旧日置川町）などで製造され、なかでも市ノ瀬が線香製造の本場であったという〔田辺町 一九三〇〕。昭和五年に調査された市ノ瀬村の概要をまとめた文献においても、「名産 線香」と書かれている<sup>3)</sup>。

一方、関東の方に向けて目を向けると、現在も線香水車を使って杉線香を製造している栃木県では、堺から越後を経由して製造技術が伝わり、元治元年（一八六四）ごろに線香工場が作られたという〔柏 一九八〇〕。詳細は後述するが、すさみ線香水車の操業も栃木県と同じく元治元年（一八六四）となっている。

紀伊半島南部を流れる富田川流域においては、上流から中流に線香水車や線香工場が複数存在したことが関係者への取材や文献で明らかになっている。明治初期には生馬村（現在の上富田町生馬）の大宮・鳥淵の両地区にそれぞれ線香水車



地図1 すさみ線香水車の位置図  
（ は紀州藩の領域。）



地図2 すさみ線香水車の周辺地図



写真2 現在のすさみ線香水車の外観（2020年撮影）

があり、大宮地区の線香水車は大正一二年（一九二三）まで操業していた。そこで生産された粉は、山を越えて市ノ瀬村（現在の上富田町市ノ瀬）の本工場に運ばれて加工されたという（生馬郷土誌 小学校百年史編輯委員会 一九八〇）。筆者が文献などを調査したところ、市ノ瀬村には一二軒の線香工場が存在していた。昭和初期の市ノ瀬村の工産額の五五%が線香産業によるもので、当時の市ノ瀬村の主要産業であったことが分かる。積み出し先は、県下及び東京方面だったという。しかし、大正末期に一軒が廃業し、他も主産業として栄えていた昭和初期のうちに何らかの理由で廃業となった（市ノ瀬小学校百年祭実行委員会 一九七八）。

また、すさみ線香水車から熊野古道仏坂の山を越えたところを流れる日置川の河口には、大正末期まで線香工場があり、日置川の上流の玉伝地区の川原谷川には、直径四メートル、石臼一五挺の線香水車もあったという（日置川町誌

編さん委員会 一九九六）。

川原谷川周辺には、現在、田辺市新庄町に本社を置く林業・製材業の株式会社山長商店が約七〇〇ヘクタールの山林を所有する。代表取締役会長の榎本長治氏によると、創業時は木炭や線香などの林産物の製造・販売を手掛ける業者で、川原谷に榎本家の水車があった可能性が高いという。線香製造に使っていた板型が、古い蔵の壁の側板に再利用されていたが、今は現存していないとのことだった。日置川流域は江戸時代から新庄村（現在の田辺市新庄町）の商人と密接な取引関係にあり、線香や炭などの林産物の多くが新庄村へ出荷されていたため、株式会社山長商店の歴史とも関わりが深い（榎本 二〇〇七）。なお、『日置川町誌』記載の川原谷川の線香水車との関連は、今後の調査で明らかにする予定である<sup>4</sup>。

日置川の上流の滝地区においても、筆者の高祖父が操業していた線香水車があったが、詳細は後述する。

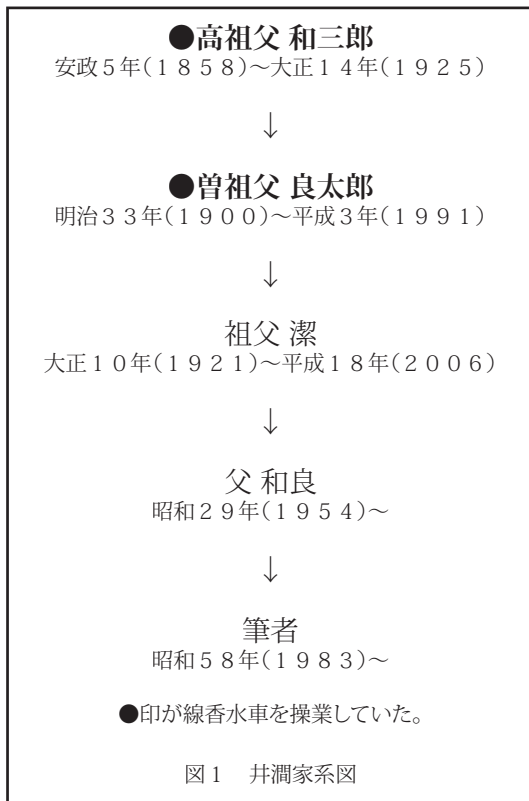
しかしながら、いずれの水車や工場も大正末期から戦後にかけてほとんどが廃業し、筆者の曾祖父・良太郎が一九七〇年頃まで操業していたすさみ線香水車が、紀伊半島で操業する最後の線香水車となった。

以上のことから、紀南地方の線香製造は、国内の他の地方と同じく一九世紀後半に各地で始まり、明治から大正にかけて最盛期を迎えたものの、第二次世界大戦の前後には急速に衰退したことがうかがえる。

## 第二章 すさみ線香水車の起源と井潤家の線香製造について

### 第一節 すさみ線香水車の起源

紀伊半島の南西部に位置する和歌山県南部には、熊野三山を中心とする文化圏が広がっている。江戸時代は三重県南部とともに紀州藩に属し、藩の直轄地



であったすさみ町には口熊野奉行所(後の代官所)が設置されたことから、紀伊半島南部の玄関口という位置付けであった。<sup>5)</sup>

すさみ線香水車は、すさみ町の北東から流れる太間川沿いに位置し、世界遺産・熊野古道(大辺路)に面して立地している。日置川の安居地区(現在の白浜町)から舟で川を南に渡り、仏坂の山を越えて峠を下つてくると、太間川に架かる入谷橋の袂に出る。水車小屋は、入谷橋の約二〇〇メートル下流に位置しており、入谷地区の最深部かつ上流の太間川地区への入り口のシンボルでもあった。『すさみ町誌』には、栃木県の線香製造開始と同じ元治元年(一八六四)に諸国屋金兵衛という人が小屋や水路を作り、操業を開始したという伝承を記している。「すさみ町誌編纂委員会 一九七八」。二〇年ほど操業したのち、事業を入谷在住の山本次郎右衛門に継承した。さらにその二五年後の明治四三年(一九一〇)に筆者の高祖父・井澗和三郎が山本次郎右衛門より買い入れて

事業を継承。「生産量は一日一五〜二〇貫目程度」「その後水路を拡げ、水車を一六挺に増設、一日三〇貫目の生産をした」とあり、事業継承後の和三郎が生産量を倍増させるために施設の拡充を図ったことが記されている。「すさみ町誌編纂委員会 一九七八」。その後、大正六〜七年頃からは原料製造だけでなく、線香製造も手掛けるようになった。大正六年(一九一七)当時、和三郎は五九歳、和三郎から事業を継承する長男・良太郎が一七歳であることから、それまでの製粉のみの事業から線香製造まで事業を拡大したのは、和三郎が主導したものと考えられる。製粉のみの操業から線香製造までの一貫した生産システムに事業を拡大したことから、当時は線香の需要が高まっていたことが推察される。関東方面へは船会社を経由し、周参見港から船で輸送していたが、鉄道が和歌山市から南へ延伸し、紀南地方に鉄道が開通する計画も事業拡大の後押しになった可能性がある。周参見駅が開業したのは、昭和一年のことであった。

## 第二節 井澗家の線香産業への進出

筆者の高祖父・和三郎は、現在の白浜町堅田地区の生まれである。井澗家は江戸時代から名字を与えられていて、「角屋」の屋号を称した。<sup>6)</sup> 和良は良太郎から伝え聞いたことを次のように語る。

「和三郎の幼少期は家が裕福だったので、和三郎は寺子屋に通っていた。読み書きと算盤ができたので、商売人として働くための技術はあった。しかし、理由は分からないが明治二五年に村八分に遭い、<sup>7)</sup> 白浜町堅田から日置川の河口付近へ墓をともなつて引越してきた。和三郎の長男の良太郎は、小学校の一、二年生ぐらまでは学校に通ったが、貧しさから小学校へ通えなくなり、母親のかん(一八七〇〜一九五五)に泣いて学校へ行きたいと訴えた。明治四

一年（一九〇八）、良太郎が八〜九歳の時に、市鹿野村（現在の日置川町市鹿野地区）で売りに出していた線香水車を買ひ、一家でその地へ引越した。そこは



写真3 井瀬家の仏壇に安置されている観音像の背面（「楠観音 市鹿野瀨」とある。）

「滝」という字名で、そこで良太郎の妹が生まれたので、「たき」と名付けられた。その場所では年間を通して水車を稼働させるための安定した水量を確保できなかったため、常に水量が豊富で枯れることのない太間川から水を引いているすさみ線香水車を新たに買入れたということだ。」

父の証言を受けて戸籍を調べたところ、良太郎の妹のときは明治四一年（一九〇八）の出生だったので、時期に矛盾はなかった。また、井瀬家の仏壇に安置されていた観音像の裏に「楠観音 市鹿野瀨」の文字が書かれていた。和良によると、この観音像は当地のクスノキから彫られたものだという。

次に、当時の線香水車の位置を父の証言をもとに調べたところ、現在の下滝地区にあったことが判明した。『日置川町誌』や『和歌山県の地名』によると、当時の下滝地区は川舟の交通の要所で、日置川の河口からの生活物資や川上からの資源や加工品などは滝の船着き場を集積され、山間部にもかかわらず都市部のように店が連なり、付近の村から人々が集まって混雑の様相を呈していたという。

このように交通の便が良い場所ではあったものの、滝での操業は水不足で水

車が十分に稼働できなかったため、四年後の明治四五年（一九一二）にすさみ町へ操業の場を移した。『すさみ町誌』によると、すさみでの操業は明治四三年となっているので、戸籍の転入手続きよりも先に移り住んでいた可能性もある。戸籍では市鹿野村への転入の履歴が残っておらず、墓の移動もなかったので、当初から永住ではなく短期的な操業が想定されていたのかもしれない。

父の証言により、市鹿野村での操業以降の経緯は判明したが、和三郎がなぜ線香産業に参入したのかについては、現在のところ詳細が伝わっておらず不明である。

ところが、戸籍を調べる過程で和三郎の妻・かんが市ノ瀬村（現在の上富田町市ノ瀬）の出身であることが判明した。父によると、和三郎とかんはお見合いで結婚で、仲人によつて富田坂（現在の白浜町）で待ち合わせるよう指示を受け、お互い気に入ればそのまま日置の和三郎宅へ連れて帰るようというのが夫妻のなれそめであったという。

同じ村内か近隣の村との婚姻が多い時代に、わざわざ流域の違う遠く離れた市ノ瀬村からかんが嫁いできたこと、市ノ瀬村が富田川流域の線香製造の拠点であったこと、かんと結婚後に線香産業に参入したことから、かんが線香産業と関わりを持っていた可能性が考えられる。筆者の調査で、市ノ瀬村の工場の一つは清水地区にあったことが分かったのだが、同地区内にかんの生家があった。明治二二年の富田川の大水害で富田川が氾濫した際、かんは不老明神の松の木に登って難を逃れたため、良太郎は生前、この松の木周辺の掃除なども時折行っていたそうである。この不老明神も、かんの生家の集落内にある。

なお、曾祖父・良太郎が筆者の父・和良を伴い、江戸時代に井瀬家に養子を出した中松家の墓に参ったことがあったが、この墓も同様にかんの生家の集落に存在する。良太郎の姉妹は、ここで先祖供養の法要もあげたという。

『市ノ瀬小学校百周年記念誌』によると、江戸期の藩政時代は、市ノ瀬村を含む富田川流域の大庄屋を務める家同士で家格維持のために互いに養子縁組をはかっており、その中には井澗家も含まれていた<sup>9</sup>。このことから、江戸時代から市ノ瀬村と井澗家に密接な関係が築かれていたことに端を発し、明治時代の線香産業参入に至った可能性が考えられる。

### 第三章 すさみ線香水車の構造と製粉過程について

#### 第一節 水車と付帯設備の構造

すさみ線香水車は、直径一五尺（約四・五メートル）で、水車の上から水を落とす上掛け水車である。水路からの落差があるため、国内の線香水車の大きさが三・五メートルに集中していることを踏まえると、平均的な大きさともいえる（中川 一九九二）。水源は太間川で、上流の取水口から三〇〇メートルほどの水路を開設し、川との落差を設けている。

戦後、筆者の祖父・潔の手によって鉄製の水車に替えられるまでは、ほとんどが木造によるものだった<sup>10</sup>。水車の付帯設備として、水車を中心として両隣に八艇ずつ合計一六艇の石臼が設けられていた。この石臼は日本有数の天然砥石である「富田石」を使用している。富田石を使うことで、摩擦熱の発生を抑制する狙いがあったと

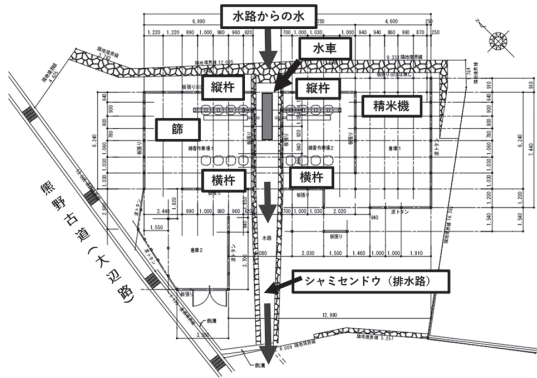


図2 水車小屋の平面図（図面作成は沖田茂利。測量は筆者も共同で行った。）



写真4 横杵(奥に縦杵(ドウツキ)が見える。)(2020年撮影)



写真5 縦杵(ドウツキ)(横杵よりも強い力で粉を搗いた。)(2020年撮影)

いう。片側八艇のうち、四艇は横杵、反対側の四艇は縦杵となっており、力の強い縦杵(ドウツキ)の方で目の粗い粉を搗いていた。その他、篩も水車と連動して稼働する仕組みとなっており、製粉以外にも精米、製材、線香製造も水車から動力を得ていたという。水車に落ちる水の量は常に豊富で、余分な水を逃がすために、水路には六箇所の洪水吐やバイパスが設けられている。水が枯れないことは大きな利点ではあるが、一方で水量過多による回転速度の調節が随時必要になるというデメリットもあった。筆者の父によると、水車の手前では最後の洪水吐となる速度調整用のバイパスが設けられていたが、夜中に雨が降るなどして増水した際は水車の回転音が早くなるため、良太郎が飛び起きて水車小屋へ走り、回転速度を調節していたという。

それほどまでに回転速度に神経を使っていた理由の一つに、火災の危険性があつた。製粉の過程で発生する摩擦熱により、火災で焼失する水車も少なくなかつたという。古座川で線香水車を操業していた三栖民平氏も、一度摩擦熱から出火して慌てて消火した経験があつたと語る。良太郎と取引きのあつた有田地方で蚊取り線香を製造していた紀伊國屋工業株式会社も、昭和三八年の火災で当時の資料が消失していた。乾燥した線香の原料は、火の気があれば燃料のごとくあつという間に燃え広がってしまうのである。

和良は次のように語る。「とにかく火は出すなと良太郎にきつく言われていた。特に小屋の中ではマツチは絶対に使うなと言われた。母屋（自宅）のお風呂の火の管理のことも厳しかった。」

このように、木製の機械で燃えやすい木粉を生産するこの産業は火事の危険と常に隣り合わせであるため、火気には非常に気を付けていた。

一方、水車に上掛けで落とされた水は、見事な石積みの水路を抜けて、農業用水路に排水される。水車の下を通る地下水路は「シャミセンドウ」と呼ばれていた。その語源は不明だが、父・和良は今もシャミセンドウと呼び、祖父・潔が遺したメモにも「シャミセンド」と記載されていた。井瀬家の水車下を通る水路の他にシャミセンドウと呼ばれるものは知らないという。近所に住んでいた松本文昭氏も、その名称は聞いたことがないとのこと、井瀬家が独自の呼称を付けていたのかとも思われた。

しかし、古座川町で井瀬家と同様に線香水車を操業していた三栖民平氏によると、三栖家においても水車の下を通る水路は「シャミセンドウ」と呼び、水車小屋の前を流れる古座川の淵を「シャミセン淵」と呼んだとのことである。上富田町生馬の大宮地区ではシャミセンドウやシャミセン淵の呼称はなかつたが、線香水車の近くの川の淵を「線香淵」と呼んでいたという。シャミセンド

ウの由来や呼称の範囲については、今後もし引き続き調査をして明らかにしていきたい。

水車やその他の部品については、木製から金属製に取り換えられたものもある。潔は、次男の真章（筆者の叔父）に次のようなエピソードを語っている。

「一〇歳の頃、金属製のギアを天秤棒に吊り下げ、安居から仏坂を越えて親父（良太郎）と二人で運んできた。天秤棒の自分が自分で、後ろが親父。ギアが重くて、天秤棒が肩に食い込んで痛くて痛くて泣きそうになった。仏坂を下りたところへ、母親が迎えに来てくれていた。母親の姿が目に入った途端、重たくて痛くて嬉しくて涙がこぼれた。」

和良によると、この時運んだギアは現在も小屋に設置されている。良太郎の長男が船大工として日本郵船に勤めて神戸にいたことから、船舶関係の機械に使用されていたギアを水車に転用するために送ってきたのではないかと、定かではない。

## 第二節 従業員

製粉から線香製造へと事業を拡大した和三郎と良太郎は、家内制手工業で従業員を二人ほど雇っていた。父が良太郎や潔から伝え聞いていた記憶によると、一人は「市ノ瀬村の根皆田の山本ゲンさん」で、もう一人は「岩田村の桑場コウタロウさん」だという。市ノ瀬村は先述したように、昭和初期には村の



写真6 篩（右）に接続する木製のギア（複数の木片を合わせて造られている。）（2020年撮影）

工産額の半分以上が線香製造業によるもので、線香製造に従事していた人も多かったと推察する。

岩田村は市ノ瀬村の下流に隣接する村である。福田茂一氏（一九二二〜）によると、岩田村で最初に線香製造を始めたのが笠松家で、岩田村の立平井の谷地区に線香水車と工場があった。桑場氏は元々、この笠松家の線香工場の線香職人で、岩田村の線香水車が水不足で操業できなくなったことから、すさみの井瀬家へ線香製造の技術を教えに行っていたという。桑場氏は聴力に障害があったが、住み込みで仕事をする傍ら、良太郎の子どもたちの面倒も見ていたそうである。終戦の五〜六年後、採算が合わなくなったことから井瀬家が線香製造を止めたが、戦前には桑場氏は辞めて岩田村へ帰っていたという。

### 第三節 原料調達

線香の原料は、スギとタブノキの枝葉である。スギが主成分で、粘性のあるタブノキがつなぎの役目を果たした。その二種類の樹木の枝葉を粉碎し、線香水車による動力で搗いて粉にする。その粉を線香工場に出荷するのである。

筆者の父・和良によると、良太郎はスギの枝葉を冬場の林業の搬出現場や土場などで調達していた。一定量を束にしたものを買い付けてきたそうである。すさみ町は林業が盛んだったため、スギはいつでも十分な量が手に入った。

タブノキはクスノキ科の広葉樹で、雑木山に自生している。太間川流域では、線香用に採集したタブノキの枝葉のことを「線香シバ」と呼んでいた。採集するのは、地区周辺の婦女子で、これは太間川流域だけでなく、調査した町内の佐本地区や、古座川町、串本町（紀伊大島）、中辺路町、上富田町のいずれの地区の線香水車においても同様の形態であった。

また、戦後に線香産業が衰退し、廃業に追い込まれた背景には、タブノキの

資源枯渇も大きな原因となったようである。

昭和八年頃、筆者の曾祖父・良太郎は当時小学生だった次男・潔（一九二二〜二〇〇六）と三男・三郎（一九三三〜二〇〇？）を連れて、タブノキを調達するために遠く九州の宮崎県高千穂地方に出張したという。太間川沿いでのタブノキの調達が難しくなったために、温暖な気候を好むタブノキが多く自生する九州地方へ買い付けに行ったのである。

高千穂で買い集めたタブノキは、現地で粉碎され、船便ですさみ町へ送られた。粉碎機と発動機はすさみから持ち込んだもので、現地で粉碎することで荷の嵩を減らし、輸送時のコストを下げるねらいがあった。

生前の三郎氏が過去に「数か月高千穂へ連れていかれた間、小学校に通えなかったので成績が悪かった」と話しており、発動機や粉碎機などの機械を持ち込んでいたことから、宮崎県での材料調達は長期滞在であったことがうかがえる。

戦後は太間川流域や古座川流域、串本町の田並地区や紀伊大島から引き続きタブノキを調達していた。幼い和良をオート三輪（通称バタコ）に乗せ、それらの地域をまわっていたという。五〇〜六〇代の女性が線香シバを背負って納品に来ていた光景も、和良が記憶している。井瀬家が所有する山にはタブノキがなかったため、井瀬家の人々は採集に従事することはなかったという。



写真7 筆者の父・和良兄弟（線香シバの束に腰かけている。）（1964年頃撮影）



また、良太郎は和良が一〇歳の頃（一九六四）、線香シバの買い付けでお世話になった方々を訪ねて紀伊大島へ行ったという。タブノキの採集にあたっていた方々がご健在のうちにあいさつ回りをしたかったとのことで、和良を連れて紀伊大島の各地区を回ったそうである。紀伊大島でのタブノキの買い付けについては、上野一夫氏も「櫛庄屋」の中で言及している（上野 二〇一九）。

線香水車の近所に住んでいた松本文昭氏（六九歳）は、中学校の修学旅行に行く際のお小遣いを線香シバで稼いだと話す。

「線香シバの買取価格は一貫一〇円で、当時は親に一〇円をせびるのも申し訳ない額だったが、線香シバはすぐに一貫の量を集められるので子どもたちにとっては良いお小遣い稼ぎになった。当時の子どもたちはタブノキの見分け方を知っており、自分も良太郎に見分け方を教わった。お弁当を携えて遠くの山へ採集に出かけることもあった。クスノキと間違つて持ち込む人、貫目を重く見せるために太い枝を混ぜる人もいた。」

なお、現在は戦後のスギ・ヒノキの拡大造林や里山の荒廃により、太間川流域やすさみ周辺ではタブノキがほとんど見られなくなった（紀南文化財研究会 二〇〇八）。現在、和歌山県内で杉線香等を製造している和歌山香醸の脇村正次氏によると、原料のスギ粉やタブ粉は九州産や外国産でまかっているとのことである。蚊取り線香製造業においても、原料は九州産が主流となっている（南海道総合研究所事務局 一九八五）。

#### 第四節 製粉・線香製造の過程

スギの伐採シーズンである厳冬期に伐採現場で集められた枝葉は、水車小屋の正面の石畳に並べられ、葉が茶色になるまで乾燥させる。その後、水車小屋の二階へ搬入し、再び乾燥の過程を設ける。二階の配置は決まっており、古い

もの（もつとも乾燥したもの）から順に粉碎機にかけられる。粉碎機は発動機で動かす。乾燥したスギやタブノキを粉碎機でチップ状に粉碎し、それを石臼の中に入れ、三日三晩ほど水車の動力で搗く。

最初は横杵で粗く搗き、篩にかけて残った粗いものは、縦杵（ドウツキ）の方の臼に入れる。縦杵の方が搗く力が強いのだという。

小屋の中は搗く過程で舞い上がった粉でどこもかしこも黄みがかっており、小屋の中で作業をすると全身に粉が付着して大変だったそうだ。

そのようにしてきた製品（粉）は、米袋やセメント袋に入れて出荷した。線香製造も、プレスなどの動力は水車に頼っていた。筆者の父が生まれた頃には既に線香の製造は止めており、線香製造過程の詳細は残念ながら不明である。

#### 第五節 出荷・取引先等

出荷先は主に東京方面で、大正期には「紀州線香」として東京市場では一定のブランド力をもっていたとされる（田辺木材協同組合 二〇〇三）。『すさみ町誌』には、周参見港から串本へ運んだあと、積み替えて東京方面へ出荷したとある。

井瀬家も東京の市場が主な取引先だったが、大正一二年（一九二八）に発生した関東大震災で多くの不渡手形を出し、井瀬家は経済的に大きな打撃を受けたという。しかしながら、震災後も生業を続けていること、馬に製品を載せて仏坂を越えて日置川方面へ輸送していることから、関東方面以外にも販路や取引先が少なからずあったと推察する。

操業当時の記録は、平成一〇年の台風で水車小屋に隣接する良太郎の自宅が倒壊した際に全て処分されてしまった。書物の類は、太間川の川原で焼いてし

まつたという。

手元には操業当時の資料はほとんど残っていないものの、有田地方の蚊取り線香製造会社である紀伊國屋工業株式会社との取引を示すハガキ<sup>11</sup>が残っていたことか

ら、戦後も蚊取り線香用の原料としてタブ粉を納品していたことが分かる（写真二二）。

## 第六節 廃業

筆者の父・和良は昭和二十九年（一九五四）の生まれであるが、物心がついた頃には線香製造は廃業し、製粉のみの操業になっていたそうである。線香製造に使っていた機械類は、上富田町朝来で線香製造業を営んでいた坂本家へ譲られたという。

製粉の廃業は一九七〇年ごろで、良太郎がちょうど古希を迎えた頃にあたる。一九八五年には、有田地方の蚊取り線香の原料も九州産のスギ粉とタブ粉になっているため、井澗家の廃業を最後に和歌山県内で原料調達できなくなったと考えられる（「南海道総合研究所事務局 一九八五」。親族に水車小屋の跡を継ぐ者もなく、以来水車小屋は設備を残したまま倉庫代わりに使われるようになった）。

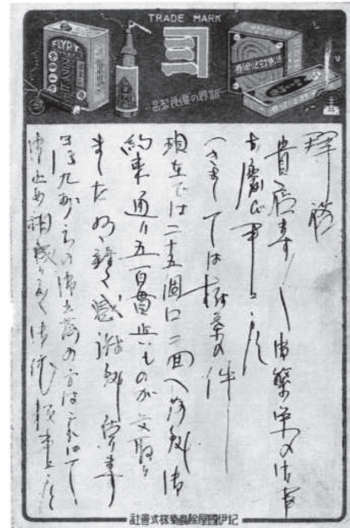


写真 22 紀伊國屋工業株式会社との取引を示すハガキ

現在に至るまで、水車小屋の二階には乾燥させていたスギの束等が当時のまま大量に残っている。

## 第四章 すさみ町内のその他の線香水車について

すさみ町では、入谷地区にある井澗家の線香水車の他に、佐本地区にもう一軒線香水車が存在したことが確認されている。

佐本地区はすさみ町の東部に位置し、太間川とは別の古座川流域にあたる。佐本川の支流の中の川から水路を引き、操業していたとされる。佐本地区在住で、操業当時を知る白滝寛志氏（九〇歳）によると、佐本地区の線香水車の起源は定かではないが、戦後昭和二十四年（一九四九）頃に廃業したという。

水車の大きさは直径三メートルほどで、石臼は八基。四基は製粉に使用し、残る四基は空だった。従業員は県外から招いた人であったという。

白滝氏によれば、「材料を採取してくるのは主に近所の女性で、母も小遣い稼ぎで採取に向いていた。枝付きだと目方が重くなるので良かった。当時はいい仕事になった。一〇貫（約一三キロ）くらい背負ってきた。」ということから、材料調達の手段は入谷地区とほぼ同じ条件であることが分かる。

戦時中においては、政府が奨励した松根油の製造に切り替え、戦後は線香製造に戻ったという。戦後数年で廃業した理由は、雑木林が人工林に取って代わられたため、原料になるタブノキが枯渴したことによる。同じく佐本地区在住の楠本氏（九〇歳）によると、佐本周辺で採れるタブノキが少なくなってきた頃、女性たちは庚申さんの敷地に生えているタブノキの枝も伐るようになり、子どもながらに「罰当たりなことをする。」と感じていたと語る。

古座川町の旧七川村で明治二十七年（一八九四）創業の線香水車を継いで操業していた三栖民平氏によると、昭和二年（一九四六）頃にすさみ町佐本の線

香水車が廃業した際、残っていた原料のタブノキを譲り受けたという。

また、すさみ町文化財審議委員長の小倉重起氏によると、線香水車が廃業した後はその動力を活かした製材工場になったという。当時の佐本では、水車を使った動力源は非常に珍しかったとのことである。跡地は製材工場としても使えるほどの広さで、当時の佐本村村長の藤本氏が経営していたということである。藤本氏の娘の花子氏（一九三四～）に取材を試みたが、花子氏は女学校進学のために小学校卒業後に田辺市へ下宿しており、佐本で父が携わっていた事業についてはほとんど記憶がないとのことであった。

なお、白滝氏は後年、地籍調査の業務に携わった折に入谷地区にある井澗家の水車小屋を訪れたことがあり、佐本地区の水車よりも大きく、石臼の数もたくさんあったので大変驚いたそうである。

## おわりに

「すさみ線香水車復活・再生プロジェクト」は、二〇二〇年度の地域課題解決型起業支援補助金（わかやま産業振興財団）を活用し、筆者の弟・井澗洗介（一九八九～）が中心となって事業を進めている。少子高齢化が進む太間川流域において、水車小屋を修復し、かつて地域の人々が線香シバを集めて持ち込んでいた頃のような地域のコミュニティの場を整備することで、多くの地域課題を解決し、関係人口を繋ぐことを目標にしている。併せて、文化的価値を再認識し、貴重な産業遺産としての価値を保存すると共に、SDGsの取り組みの一環として、水路を活用した発電や動力源としての活用等を目指している。

さらに、二〇二一年一月には、すさみ線香水車の保存や活用を担っていく有志の団体「すさみ線香水車たまぐすの会」が発足した。地元関係者をはじめ、線香関連企業など多方面から多くのご賛同をいただいているが、新型コロナウイルス

イルス感染拡大の影響により二〇二一年度の活動の見直しは立っておらず、会報誌の発行のみにとどまっているのが残念である。

現在、二〇二一年度の文化庁の調査を待っているところで、老朽化した水車小屋の倒壊を防ぐための応急措置を施した後は、調査が終わるまで手を付けられない状態になっている。良太郎の六男・宗三氏が、二〇二〇年に亡くなる直前に「水車小屋の二階に、元々使っていた木製の部品をかためて置いてある」と証言しており、当時を物語る遺構など、まだまだ貴重な発見が隠れている可能性が大いにありそうだ。実際に柱の補強を行っているときに、建造当時の木製のギアが天井から落下し、ギアが一枚板ではなく複数の部材から成り立っていることも判明している。

今後、文化庁の調査を待ちつつ、並行して聞き取り調査や文献等の調べを進め、井澗家の線香水車とともに紀伊半島の線香産業の実態についてもさらに明らかにしていく予定である。

二〇二二年は筆者の祖父・潔の一九七回忌、二〇二三年には曾祖父・良太郎の三三回忌を迎える。二〇二四年は、高祖父の和三郎の二〇〇回忌も控えている。筆者の記憶では、生前の祖父や曾祖父から水車の話を聞いたことは一度もなく、いまわの際に祖父・潔が遺したメモ（参考資料参照）から察するばかりではあるが、祖父が線香産業や水車に見切りをつけながらも望郷の思いを水車の音に添えていたことから、水車本体はもちろん、その記憶も守り継いでいきたいと思ひ、今回思い切って筆をとることにした次第である。

末筆ながら、本稿をまとめるにあたり、聞き取り調査にご協力いただきました地域のみなさま、ご指導くださった近畿大学の藤井弘章先生、すさみ線香水車の修復プロジェクトを応援してくださっている関係者のみなさまに、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

## (参考文献)

- 生馬郷土史 小学校百年誌編輯委員会 一九八〇 『生馬郷土史 小学校百年誌』 生馬小学校百年祭実行委員会
- 市ノ瀬小学校百年祭実行委員会 一九七八 『市ノ瀬小学校百周年記念誌』
- 宇井縫藏 一九二九 『紀州植物誌』 近代文藝社
- 上野一夫 二〇一九 「櫛庄屋」 『熊野誌』 第六三号 熊野地方史研究会
- 榎本修造 二〇〇七 『万代記』 「御用留」 に見る江戸時代の新庄村』 財団法人新庄愛郷会
- 大石道義・池森寛 二〇〇九 「樹葉製粉山下水車場遺構とその保存活用」 『日本機械学会講演論文集』 一般社団法人日本機械学会
- 小川由一 一九七三 『紀伊植物誌(二) — 紀州路の植物と民俗をたずねて —』 紀伊植物誌刊行会
- 尾鷲市編 一九六九 『尾鷲市史 上巻』 尾鷲市
- 柏 順子 一九八〇 『杉線香の話 — 片隅に残る伝統産業 —』 筑波書林
- 上富田町史編さん委員会 一九八九 『上富田町史 史料編中』 上富田町
- 紀南文化財研究会 二〇〇八 『熊野古道 大辺路調査報告書』 大辺路再生実行委員会
- 日下部兼道 一九三九 「杉及びタブ葉による線香原料の製造の実際」 『山林』 第六七六号
- みえ熊野学研究会編集委員会 二〇〇八 『熊野産業史 海と山の恵みに生きる』 東紀州まちづくり公社
- 熊野市史編纂委員会 一九八三 『熊野市史 上巻』 熊野市
- 熊野市史編纂委員会 一九八三 『熊野市史 中巻』 熊野市
- 熊野路編さん委員会 一九七五 『くまの文庫⑧ 森林と動植物』 熊野中辺路刊行会
- 三和インセクティサイド社史編纂委員会編 二〇一九 『三和インセクティサイド五十年のあゆみ』 三和インセクティサイド
- 下中邦彦 一九八三 『和歌山県の地名』 株式会社平凡社
- 社団法人鉄道貨物協会天王寺支部 一九五六 『南近畿の物産案内』 社団法人鉄道貨物協会天王寺支部
- 杉谷政樹 二〇一〇 「杉葉線香の製造機械類」 三重県環境生活部文化振興課ホームページ <https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/rekishu/kenshi/asp/shijyo/detail.asp?record=612>
- すさみ町 二〇二〇 『すさみ町第五次長期総合計画』
- すさみ町誌編纂委員会 一九七八 『すさみ町誌』 上巻 すさみ町
- 田辺木材協同組合 二〇〇三 『木に生きる』 田辺木材協同組合
- 土井幹夫 一八八五 「線香原料杉葉粉解説」 『山林』 四三
- 中川徹 一九九一 「我が国における水車使用の現況」 『ターボ機械』 一九二
- (二) 一般社団法人ターボ機械協会
- 北海道総合研究所事務局 一九八五 『和歌山の地場産業』 北海道総合研究所
- 日本地域社会研究所 一九七六 『日本の郷土産業 4 近畿』 新人物往来社
- 浜岡きみ子編 一九九八 『淡路いちのみやの香り』 淡路市教育委員会
- 日置川町誌編さん委員会 二〇〇〇 『日置川町誌 通史編 下』 日置川町
- 藤井弘章 二〇二一 a 「線香・蚊取り線香原料としてのタブ粉の歴史」 近畿大学文学部論集『文学・芸術・文化』 第三三巻第一号
- 藤井弘章 二〇二一 b 「線香原料(タブ粉・スギ粉)製粉の歴史と民俗・和歌山県古座川流域・三栖家の製粉場(線香水車)と製粉工程」 近畿大学大学院総合文化研究科紀要『混沌』 一八

みえ熊野学研究会編 二〇〇八 『熊野産業史 海と山の恵みに生きる』 みえ熊野学研究会

三重県南牟婁郡教育会 一九二五 『紀伊南牟婁郡誌 下巻』 三重県南牟婁郡教育会

水原賢造 二〇〇二 『日置川物語』 水原賢造

盛永俊太郎・安田健 一九八七 『享保元文諸国産物帳集成 第VI巻 紀伊』 霞ヶ関出版株式会社

林野庁 二〇一四 『林野(八三)』 森の名手・名人 林野庁

和歌山県 一九二〇・一九五〇 『和歌山県統計書』 和歌山県

和歌山県 一九五四・一九六四 『和歌山県統計年鑑』 和歌山県

和歌山県西牟婁郡田辺町 一九三〇 『和歌山県田辺町誌』 和歌山県西牟婁郡田辺町

山形健介 二〇一四 『タブノキ』 一般社団法人法政大学出版局

#### (写真提供)

写真一 STUDIO CACCI 細野由加

注記のない写真はすべて筆者撮影である。

#### (参考資料)

筆者の祖父・潔が遺した水路に関する歴史のメモ

(子供の頃屋号をタイスト云々)

元治元年(1864)すさみ町周参見山崎の諸国屋金兵衛と云ふ人が水源を太間川に求めた水車小屋を開設し(水路200m余)設け、二十年余年続けたが明治18年頃入谷の山本次郎右エ門が線香の製粉加工場を継承した。

明治22年の紀伊半島の大水害は太間川にも及び河敷が下り取水口が間に合はなくなった。その時は今まで大石のかみ手の井堰から箱トユを掛けてミドテ(水路)につながっていたが1m余りの底下で従来の取水位置からでは間に合はず、ナガブチ迄延ばしたと聞く。この様に昔の人は苦勞して継承してきたが世のうつりと産業の変化からこの工場は昭和28年に水車の回転は終に休止した。<sup>12</sup>但しこの屋敷があるかぎり水路はこれに付随するものであり水利に関しては継承するものである。

昭和24年迄は線香屋専用水路であった。昭和22年の台風にかんがい用水路はオオタキから榎木の下まで完全に流され川と化し水路の役に立たず線香屋の水路の水で間に合はせてトユで一時をしのぎ昭和24年の台風にも流されて同じような苦汁を経験した。これではと考へたのでしよう。その頃の(タド)の世話人が線香屋の水路を拡巾利用さして呉れとの交渉がありナガブチから榎木の水落までを役場農業関係から補助を受けて拡巾工事を行い取水することになった(それまでの線香屋の水路はせまかった)。その時太間地嶋田建吾、堀切桂(カクゴ)、松ノ本松本量一、入谷山本実各世話人の一筆をもらっていたが平成十年の台風家屋倒かいで紛失してしまったようである(筆者注…残念。念書はその後発見)。

シャミセンドの工事に当っては、その上に掛かっている長方形の石橋をつまみ出して置くとか何かななる?セキヒ、ニワイシの石材になる。

筆者注…この資料は、祖父の遺品のノートから発見された。その他、良太郎や和三郎についても記述しようとした形跡があったが、題目のみで詳細は書かれていなかった。

## (注)

- 1 すさみ町には墓参りや法事等でしか訪れたことはなく、筆者は年に一度訪れるかどうかという程度であった。小屋の存在は認識していたが、農機具小屋だと思つて立ち入ったこともなかった。
- 2 田辺市立図書館にて、大正元年から昭和二年の統計書を確認した。ただし、所蔵されていない年度のものもあり、すべての年度は確認できていない。
- 3 上富田町立図書館に所蔵されている『生馬村・朝来村・岩田村・市ノ瀬村・鮎川村』という文献より引用した。この文献は、図書の一部を複写して簡易製本したものである。昭和初期に和歌山県内もしくは西牟婁郡内の概要をまとめた図書の一部と思われる。上富田町誌編纂委員会の印が押されているため、町誌編纂の過程で収集された資料と考えられるが、詳細は不明である。
- 4 榎本家の蔵には、当時の林産物の取り引きを記録した多数の古い帳面が所蔵されている。
- 5 すさみ町第五次長期総合計画 二頁 すさみ町
- 6 白浜町堅田にある聖福寺の過去帳と井澗家の仏壇の位牌を照合したところ、最も古い位牌は寛保三年（一七四三）没の角屋傳次兵衛のものと判明した。嘉永年間の過去帳には「井澗」の名字も記載されており、戒名も当主やその妻に居士・大姉が付けられていることから、その地域においてある程度高い地位を得ていたことがうかがえる。『上富田町誌』によると、寛永一七年（一六四〇）没の井澗久太郎長が井澗家の始祖とされ、その墓が上富田町岡の普大寺に現存する。中世に上富田町市ノ瀬を拠点に勢力を誇っていた山本家の家臣団であったと伝えられている。
- 7 堅田村最後の村八分として、堅田村の聖福寺やその近辺の住民にも伝わっていたが、後に村八分を主導した家から「村八分は間違いであった」と名誉回復の後押しがあり、戦後に井澗家の墓は再び聖福寺に戻された。
- 8 現在、この松は松くい虫の被害により、枯損してしまった。
- 9 『市ノ瀬小学校百周年記念誌』によると、大庄屋を務めたのは、いずれも山本氏の家老であったという。
- 10 戦後、復員した潔は、当時高校生だった末弟の宗三に指示して、水車を木製から鉄製に変更した。潔の指示のもと、鉄板を裁断・整形したと生前の宗三が語っている。サイズや形などは、木製のものと同じである。
- 11 昭和二四年に取引をした際のハガキが、井澗健吾氏（良太郎の三男・三郎の長男）のもとに保管されていた。（写真二参照）
- 12 実際には昭和四五年（一九七〇）頃の廃業である。

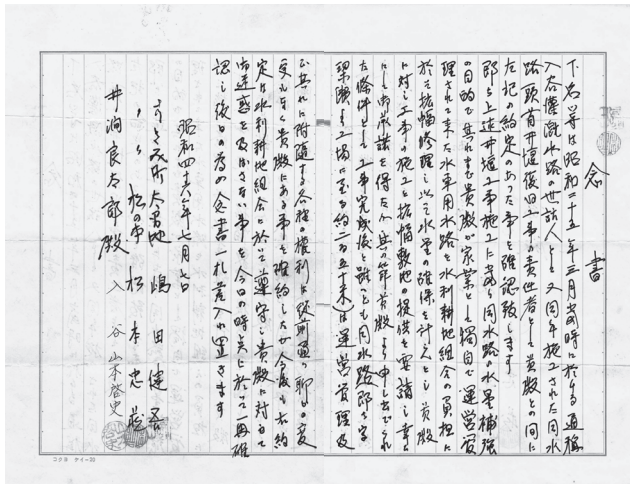


写真9 水路に関する念書

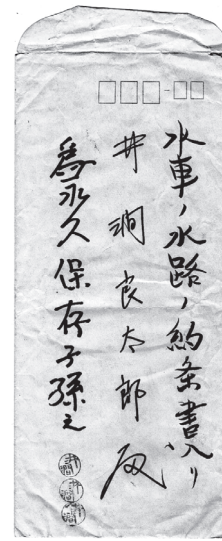


写真8 念書が入っていた封筒（「為永久保存子孫之」と書いてある。）

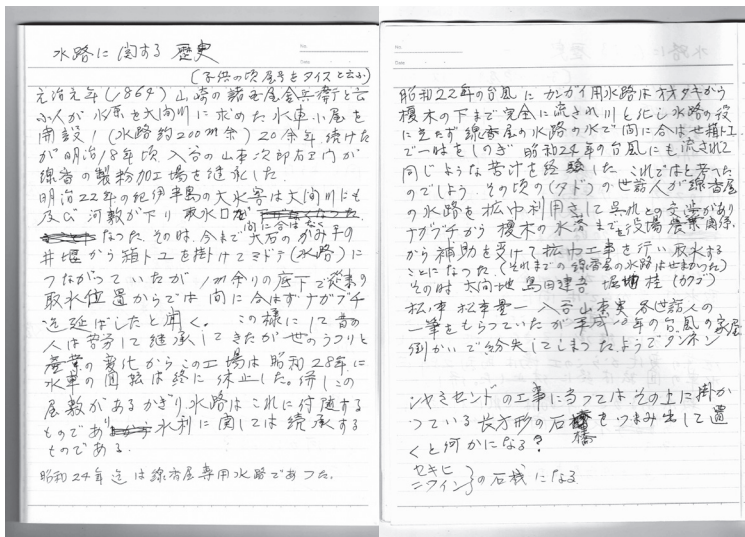


写真11 潔が遺したメモ



写真10 良太郎と潔が天秤棒で運んできた金属製のギア

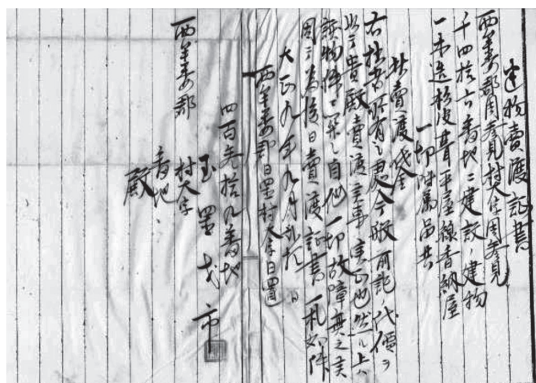


写真13 水車の売買契約書の下書き



写真12 水車の売契約書



写真15 篩（ここで出た粗い粉は、縦杵の臼へ入れられた。）（2020年撮影）



写真14 シャミセンドウの石垣



写真17 水車の下シャミセンドウ



写真16 現在の水車(金属製の部分が腐食している。)





写真19 筆者の曾祖父・井澗良太郎（1900～1991）



写真18 木立の中を通る水路



写真21 オート三輪（通称バタコ）（側面に「⊕」のマークが書かれている。このバタコで線香シバを買い付けに行った。写真左から潔、三郎、宗三の兄弟。）



写真20 筆者の高祖父・井澗和三郎（1858～1925）